

# 新資料「伊藤圭介関係書翰集」

について

谷澤 尚 一

東京都立中央図書館の特別文庫に収蔵されている「伊藤圭介関係文書」(仮称)は、卷子仕立の貼り込み五十一巻で、原本記載の番号七五七八〜七九〇〇(特別文庫、渡・一七〇〜一四九一)の三百二十三通は質量ともに、国立国会図書館伊藤文庫の「伊藤圭介書簡集」三冊(五十通)その他の資料を凌駕する未公開のコレクションである。その内容を閲するに、年次の記載あるものが僅か十九通(約六%)に過ぎず、諸文書写や漢詩文断簡などを若干含み、貼り込み順序も不統一で、前後錯雑のため通読すら容易でないが、年次を判別できる上限は文化二年(一八〇五)に始まり、下限は明治三年(一八七〇)迄に及ぶ。これらの文書を大別すると、概ね次のように集約でき

- 一 西山玄道関係 (文化二〜天保十二)
  - 二 宇田川溶庵関係 (天保四〜天保五)
  - 三 木曾伐採御用関係 (天保九)
  - 四 尾張藩洋学所関係 (安政六〜慶応三)
  - 五 蕃(洋)書調所関係 (文久元〜文久三)
  - 六 種痘関係 (文久二〜慶応三)
  - 七 藩廳往復関係 (文政十〜明治三)
  - 八 雑文書及び詩文断簡等
- 右のうち本道(内科)医師圭介の身辺を窺い得る資料は、尾張藩御目見一段席として、天保九年に木曾へ赴いた折の書翰である。
- 先ず三に例示した事項(二十通、但し未確認のものは除く。)の日附と細目を挙げてみる。
- (頭書の数字は文書番号)
- 七八八五 ウ4/24 覚 へ大湫V(送状)
  - 七八八二 ウ4/25 圭介へ中津川Vより尊大人・惠祥へ
  - 七七八二 ウ4/25 圭介へ中津川Vより玄道へ
  - 七八六〇 ウ4/26 圭介へ中津川Vより西山玄道へ
  - 七八六一 5/17 圭介へ付地Vより西山玄道・惠祥へ

- 七七四三 5/18 公儀先触写  
 七七四七 5/18 公儀先触写  
 七七三一 5/18 圭介へ付地▽より西山玄道・惠祥へ  
 七八八九 5/23 圭介へ王滝▽より西山玄道へ  
 七六二四 5/23 野村立栄より玄道へ  
 七八二六 5/28 三尾精庵より圭介へ  
 七八二一 6/4 亀屋甚右衛門より圭介へ  
 七八四八 6/5 方円(立栄)より錦窠(圭介)へ  
 七六〇八 6/14 立栄より圭介へ  
 七八一三 6/27 玄道より圭介へ  
 七八一九 6/27 田口養節より圭介へ  
 七八三三 6/28 田口養節より圭介へ  
 七八二四 6/28 亀屋甚右衛門より圭介へ  
 七六一四 6/30 野村立栄より圭介国手へ  
 七六〇九 6/30 岡部春林より圭助<sup>(P.6)</sup>へ

これらのうち、圭介の書翰は、

「当時の書翰が多数残っていたよしであるが、戦後のいまでは減多にみる事ができない。」(杉本勲『伊藤圭介』P

83、昭和三五年刊)

と指摘されている書翰類らしい。また、

「本書状は一通の記事が数日分であることから、かなり多数の書状が出されたと推定されるが、本稿で紹介する三通(私註=5/8・5/21・5/28)以外には紹介されていない。」(種田祐司。名古屋市博物館・「研究紀要」P 35。昭和五六  
 年刊)

ともいわれているように、他に資料紹介としての所見がない。

右によれば、木曾出張中に名古屋の両親へ宛てた圭介書翰六通は、同役であった外科医野村立伯(二世立栄。天明五  
 へ弘化二・五・二八歿。61)等の書翰と共に、従来詳細を欠いていた動静の空白を埋めるに役立つ。

即ち、川路三左衛門(聖護)との接触が知られるほか、治療の参考にと漢方の鍼術書『医学至要鈔』を旅先で取寄せているなど、当時の本草学における蘭学者が、医療面では折衷を脱し切れぬ実態を浮き彫りさせる。

さらにまた、尾張藩洋学所との関係や蕃書調所出役などの経緯についても、国会本との関連から究明を一層深めることも可能で、書翰集の内包する多面的な意義を改めて見

直す必要があるろう。

参考文献

東京都立中央図書館第九回特別資料展（昭和五十

六年十月）

「本草・博物学とその周辺」

展示解説目録

（東京都世田谷区砧七―一六―四）

『慾齋覚書』について

遠藤 正治

飯沼慾齋（一七八三―一八六五）は科学的植物分類法実行者の鼻祖と仰がれ、本草・植物学者としての業績は普く知れ渡っている。その反面、本業の医学については明らかにされていないところは驚くほど貧困である。

この未解明の蘭医としての側面に光を当てる瞳目すべき文書が、岐阜市の飯沼順二博士によって昨年自邸から偶然発見された。

本報はこの飯沼家文書『慾齋覚書』の紹介を目的とするが、当時慾齋の近辺に居て親交のあった江馬活堂（一八〇六―一八九一）の日記等との対比を試みたのでその結果をも一、二報告する。識者のご批判を請いたい。

『慾齋覚書』は一冊しか見つかっていないが、自筆の覚書類としてはこれが始めてである。縦二五・六センチ、横十七・五センチ、墨付わずか十七枚、保存状態は良好で